

From 'long-back'd' to 'long-roof'd' :
Wordsworth's Later Modification in The Prelude
(In Honour of Professor Fumio Miyahara On the
Occasion of His Retirement)

Hirota Minoru
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/1354646>

出版情報 : 英語英文学論叢. 47, pp.1-15, 1997-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン :
権利関係 :



ワーズワス『序曲』第三卷‘long-back’d’から ‘long-roof’d’をめぐる――

序 論

廣 田 稔

『序曲』第三卷は1787年10月から翌年の夏期休暇の直前までのケンブリッジでの大学生活を扱ったものである。その冒頭はケンブリッジに入学するためにワーズワスが初めてケンブリッジの街並みを見る件となっている。朝の暗くどんよりとした空の下、ハンティンドンの平野を走って来た馬車は Castle Hill の城跡の下を通り、モードリン橋を渡って街に入る。詩人が最初に目にしたのは、ほの暗い木立の上に尖塔を聳えさせているキングズ カレッジチャペルの長い建物とガウンを身にまとい、房のついた帽子を被った学生の姿である。

この件、最初の四行は E. de Selincourt による1805年版では以下のように記されている。

It was a dreary morning When the Chaise/Roll'd over the flat Plains of
Huntingdon/And, through the open windows, first I saw/The long-
back'd Chapel of King's College rear/His pinnacles above the dusky
groves.

(book III, ll.1-5)

馬車がハンティンドンの平らな平野を転がるように進んだのはどんよりとした朝であった。そして開いた窓から私は始めてキングズ カレッジの背の長い礼拝堂が薄暗い木立の上に尖塔を聳えさせているのを見た。

ハンティンドンはケンブリッジの北西約15～6マイルの位置にあって、そこから T. S. エリオットの『四つの四重奏』の中に詠まれ、ジョージハーバートゆかりの教会の建つ Little Gidding もさ程遠くない。現在 A604 という道を南に辿ってケンブリッジに入ると Huntingdon Road となり、その道は城跡下の Castle Street へ続き、モードリン橋のある Magdalene

Street を経て、Bridge Street となる。更にノルマン教会として知られる Round Church 前を右に折れると、St. John's Street であり、こここそが詩人ワーズワスの学寮 St. John's College がその右手に広がる所である。

『序曲』第三巻、1787年10月から翌年の夏期休暇直前までの、詩人が17歳半ばから18歳までの学生生活を記した中に以下の記述がある。

The Evangelist St. John my Patron was,/Three gloomy Courts are his ; and in the first/Was my abiding-place, a nook obscure !

(Book III ll.44—46)

福音者聖ヨハネこそ私の守護神であった。三つの小暗い方庭があり、その最初が私の起居する所。ほの暗い片隅であった。

道はその先きにバイロンやテニソンの学寮Trinityを右手に控えたTrinity Street となり、最終的に King's Parade に至る。King's College Chapel は右手、King's College の右翼に高々と長く聳えている。通りからは後方に長く延びた建物と見える。この礼拝堂はケンブリッジ大学のシンボルとも称することもできるような、数あるカレッジ チャペルの代表的なものである。Virginia Woolf はその実験的小説、『ジエイコブの部屋』にこの厳肅かつ尊厳な礼拝堂に敬虔な権威ある姿をガウンに包んだ聖歌隊が整然と行進する様、古いステンドグラスを通して斜めに射し込む紫や黄色の光が堂内の敷石を柔らかに赤、黄、紫と染める中、全てが秩序立つ礼拝堂に荘重に響き渡る歌声とパイプオルガンの音の鳴り響く様子を見事に描き出している。ワーズワスもそのソネット *Ecclesiastical Sonnets* (1882) に高々と聳える柱と枝分れした天井が自ら均衡を保ち無数のくぼみとなる中に、光と陰とが憩い、楽の音がたゆとう様子は甘美な永遠不滅な思想を思い起こさせ、また静まりかえった礼拝堂に突如として鳴り響く音楽は、信心深い人々の目を歓喜のペイルで覆うと記している。

扱てワーズワスは上記ハンティンドン ロードからモードリン橋のかかるブリッジ ストリートという道筋を通っていることが次の二行によっても明らかである。

Onward we drove beneath the Castle, down/By Magdalene Bridge we went and cross'd the Cam, . . .

(Book I, ll. 13-14)

僕らは城跡の下を通り、モードリン橋にさしかかり、キャム川を渡った
……。

ところでここで問題としたいのは1805年版の四行目にある'long-back'd Chapel of King's College'が1850年版では'long-roof'd chapel of King's College'と書き改められている点である。

It was a dreary morning when the wheels/Rolled over a wide plain
o'erhung with clouds,/And nothing cheered our way till first we saw
The long-roof'd chapel of King's College lift/Turrets and pinnacles in
answering files,/Extended high above a dusky grove.

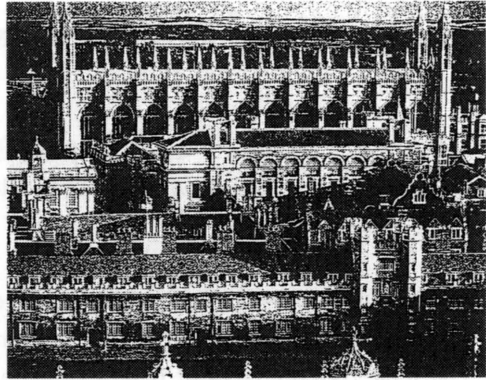
(Book III, ll. 1 ~ 6.)

馬車の車輪が雲の垂れこめた広々とした平野を転がり進んで行ったのは、もの寂しい朝であった。そして僕らの行く手に何一つとして心はずませるものはなかったが、その時初めて長い屋根のキングズ カレッジの礼拝堂が小塔や尖塔を縦によく釣り合って並ばせながら頭をもたげ、薄暗い木立ちの上に高々と聳えさせているのが目に入った。

一体この必然性はどこにあったのだろうか。この小論は後に考察を譲る主論の序論となるものであるが、上の修正の必然性を導き出す手掛りへの一つの試みである。ワーズワスの詩人としての特徴的な想像力に関しての踏み込みはこの序論では簡単な言及に留めその点は主論に於いて論じることとしたい。それはとも角、'the Castle'と称されるのはウィリアム征服王ゆかりの城を示し、史実によればウィリアム征服王は1066年の英国征服の僅か2年後にはケンブリッジを訪れ、ここに築城させたとされるものである。今日この城跡はCastle Moundと称する小高い丘となって残っている。ワーズワスがケンブリッジに入ったのは街の北西方向からであり、King's College Chapelを最初目にした時、彼はこの東西に長い建物の北側を目にしたことは既に見た『序曲』の数行や地図の上からも明らかである。

ワーズワス青年がこの建物の小塔や尖塔を見て即座にそれが礼拝堂のものであることを察知したか、或いはケンブリッジの街中に到着した後その長い建物が礼拝堂であることを知ったかは、この際問う必要はないであろう。こ

の詩を書いた時点では当然この建物がチャペルであることを知っていたからである。問題とすべきは'long-back'd'とすることによってかかえ込む多義性であり、この詩を読む人々に与えかねない誤解であろう。この建物を目にした瞬間詩人が心にどのようなことを思い浮べたかは推測の域を出ないとしても、その推測を可能性として仮定してみることは無駄ではないかも知れない。



先ず青年ワーズワスがこの建物をごく当然ながらチャペルとは知らずに、目にした瞬間なんと長い建物だろうとのみ単純に考えたと仮定することから始めてみたらどうだろうか。これは誰も自然のことであるだろうし、後に見るように King's College Chapel には通常大きな聖堂にあるような左右の袖廊の出っ張りがないことによって、これを一見してすぐに礼拝堂と知ることには困難ではなかったろうかという推測からである。礼拝堂ではないとしてもどちらが建物の前でどちらが後であるのだろうかと考えるのは自然であろう。その時可能性として「長く後にのびた」建物という見方であったかも知れない。

しかしこの建物が礼拝堂であることが判明した時点で、建物に後部があることと考えること自体が明らかに間違いであることが分るのである。というのも礼拝堂は常に東西に建てられるものであり、四方の面にどちらが前でどちらが後といった観念の入り込む余地がなくなってしまうからである。船にも喩えられる教会は東に altar (祭壇) が置かれ、中央に Nave (身廊) が走り、南側と北側に transept (袖廊、翼堂) があり、西側に入口、西側に近い方に南と北にそれぞれ入口を持つ。これが基本的 Church Plan である。キングズのチャペルに袖廊はない。西側の入口は女王を初め王室の者の出入りする扉として通常は開かずの扉である。このことによっても明らかのように東西南北どの方向にも前や後という見方は出来ない。ワーズワスはこの事を熟知していたとしても'long-back'd'のままに残したとすれば、読者に Church Plan に関する詩人の知識の欠如を疑わせる結果となる可能性、つまりは詩人の知

性に対する不当な誤解を生じかねないという危険性を放置することになると気付いたのではないだろうか。

'long-back'd'に多義性を与える他の要素はキングズのチャペルには他の教会にはない特殊な地勢上の状況が伴っていることである。それはチャペルの西側には The Backs と称されるキャム川に沿って南北に長く広大な緑地帯が広がっているということである。このことも'long-back'd'から'long-roof'd'への修正に反映した可能性を持つものではないかと推測される。いつの頃からその呼び名が付けられたかは定かではないものの、このチャペルを創建した Henry 6 世(1446年7月25日着工され、王自身が礎石を置いた。その後 Edward IV, Richard III, Henry VII, そして Henry VIII の1536年、90年の歳月をかけて完成を見た)はキャム川沿いまでの土地を切り開き、それが The Backs の始りとされる⁽¹⁾。この状況からみれば、ワーズワスの入学の年は完成より既に250年を経ていることでもあり、The Backs という呼称も存在していたのではないかと察せられる。仮にその呼称はなかったとしてもこの緑地帯はクイーンズからキングズ、クレア、トリニティ、かつ St. ジョーンズ各カレッジの文字通り裏手後方に位置する長い裏庭であるので、このことに鑑みるならば'long-back'd'は「長い裏庭を持つ」(但しこの際裏庭とはチャペルのみの裏側という意味ではなくチャペルを含む各カレッジの裏にあるという意味で)という意味も含まれてくる可能性がある。しかしこうした理解を可能とするにはケンブリッジの地勢についての知識の後補を要するのであり、こうした解釈は多少万人向きではないきらいがなくもない。しかし詩的想像力の奔放さを重んじた当時の詩人の心境からすれば、これは面白い言葉遊び的感覚の導入であったかも知れないのである。とすれば'long-back'd'は先ず「長い背を持つ」と「長い裏庭を持つ」という二つの意味の解釈が出てくる。この際 back に一応「背」という語を与えてみるが、それも詩人が pun と称すべき何らかの言葉遊びへの意識が働いていると思われることによる。1850年版では'roof'と変えられることによって、この'back'は「屋根」の意であることが明瞭になるので1850年版に基づいてこの個所を論じることはあまり意味を持たず、要するにワーズワスは'back'd'を「屋根を持つ」という意味であったと結論付けているということになる。しかし問題は1850年版では'roof'と修正するに伴い'lift'という語で1805年の'rear'という語を修正してい

(1) Michael Hall, *Cambridge* (Cambridge : The Pevensey Press, 1980), P.45.

る点である。‘rear’という語は後に見るように動物的イメージをも喚起するのに対し、そのようなイメージを取り除いた neutral な‘lift’という語を用いていることに全く同じチャペルの描写でありながら数十年の歳月を経た後のこの描き方には、若く希望と情熱に溢れていた詩人の客体に対する捉え方とは微妙な変化を感じさせるのである。

先きに1805年の‘back’d’を「背を持つ」とした。それは動詞‘rear’を用いることに表われているように、詩人が恰もチャペル自体を動物、しかも尖塔という角のある躍動感ある長い背を持つ巨大な動物であると捉えたのではないかと思われるからである。馬が後足で逆立ったり、へビがかま首を持ち上げたり、熊が立ち上ったりする時に、‘rear’という語で動物に用いられるイメージの導入は‘My spirit was up, my thoughts were full of hope’「私の精神は高揚し、私の思いは希望に満たされていた」⁽²⁾と述べていることにも明らかに示されるように、ケンブリッジに入学するという青春の情熱に燃え立っていた詩人の心的状況を映すに相応しく、彼の目に巨大な獣物の姿が映ったとしても不思議ではない。

筆者は詩人が実際どのように King’s College Chapel を見ることができたか、Castle Mound に登ることによって検証を行った。Mound はさ程高くないが、登りつめた場所は平たくなり、そこからはケンブリッジ周辺をぐるりと360°に見渡せるもので遥かケンブリッジシャーの田園も地平線まで視野が広がる。King’s College Chapel はケンブリッジの街並みの中程、Mound からは南の方角に東西に横に長く建っている。東と西の端、長い屋根の先端には長く尖塔がひときわ高く突き出している。しかしよく見てみると、東側の尖塔は左右の2本が確認できるのに対して西側は Mound からの距離もさることながら、Chapel に対する Mound の角度と頂上部分の限られた広さのために、どのように見る位置を変えても、2本の尖塔は手前の尖塔に向いの尖塔が隠れたまま、恰も1本しかないように見える。まるで巨大な怪獣の2本の角と尾であるように見えるのである。怪獣が四つん這いとなっていると想像しても決して不思議ではないと思われるのである。筆者にとってこのことはワーズワスの用いた‘back’d’という語や‘rear’という動詞の必然性が理解できたという意味で大変重要なものがあり、この一点だけは是が非でも確め

(2) William Wordsworth, *The Prelude*, Ernest de Selincourt ed. (London: Oxford Univ. Press, 1926), Book III l. 16.

たいとケンブリッジを再訪した努力は無駄ではなかった。ワーズワスの詩の理解にとって彼の足跡を訪ることは不可欠と思われ、そのために詩人の生家を Cockermouth に訪ねることを手初めに、Hawkshead の彼の通ったグラマー スクール、そこで彼が自らナイフで机に刻んで残した名前を確認し、Grasmere のダヴ コテージと教会の彼の墓、最晩年を過ごした Rydal Mount の屋敷、「水仙」の詩を生み出した Ullswater の湖畔を辿り、ダーウエント ウォーターに臨む Keswick の谷間や『序曲』二巻348-53に記しているホークスヘッドに近い美しい Esthwaite 湖を訪れ、少年の日の詩人が早朝学校の始る前に周囲を一周していた姿を思い浮べるといったことは全て上記の詩の個所の理解とつながるものであったと言っても過言ではない。『序曲』という詩人の精神史を理解するためには、詩人の歩いた足跡を直接に辿ってみることがいかに必要と思われた。むしろそれは不可欠なことに思われたのである。詩人が直に接した自然の中に身を置いてみることで、詩人の得た不可思議な自然との霊的交感の何ものかへの理解が可能とは言わずとも、そこに近づき得るような思いを得た。そこに King's College Chapel に動物を重ね連想した詩人の想像性の依り所を探ることが可能に思えたのである。詩人が少年であった頃、あの「水仙」の岸辺、Ullswater 湖南端の Patterdale の溪谷の湖畔につながれていた羊飼いのボートをこぎ出した時のことについて語っていることを想起してみればよい。この時詩人は、険しく聳えた岩山がまるで生き物でもあるようにむっくりと頭をもたげ、彼を大またで追いかけて来るという経験をした⁽³⁾と言う。これは詩人にとって決して妄想ではない真実のものであったのである。この例にも見られるように本来は静的客体と見なされるものが、生命体として躍動する実感を得ることが詩人にとっては可能なことであった。このようなことは King's College Chapel を目にした数行後の描写にも表われている。ここではケンブリッジの街が生命力、詩人を今まさに吸い込まんとする力強い吸心力を持つことを述べるのである。

The Place, as we approach'd, seem'd more and more/
To have an eddy's force, and suck'd us, in/
More eagerly at every step we took.

(Book III, ll. 10-13)

この場所は近づくにつれて増々渦潮のような力を持っているように思われ、

(3) See *The Prelude*, Book I, ll. 372-427

僕たちが歩を進める毎にいよいよ激しく僕たちを吸込むのだった。

自然の中で育った詩人にとって、おしなべて都会の情景はある力強さで迫ってくるのが通常であった。第8巻688行から709行にはロンドンを見た時の強烈な印象が綴られている。その時詩人は“weight and power,/Power growing with the weight”「重みと力、重みと共にいや増す力」⁽⁴⁾を備えたこの都市に力強く揺さぶられるような瞬間を経験したと言うのである。

このように17歳の若者であった詩人にはケンブリッジ大学とこの中世の大学を擁するこの街は力強い生きもののようなイメージを備えていた。北方の湖水とその谷間に囲まれた豊かな自然の静ひつな空気に包まれながら生い育ち、多感な少年の心を保持していた彼をこの街は不思議なダイナミックな魔力で引き寄せたのである。少くとも始めてこの古い中世の街並みと邂逅した瞬間の詩人にとってそれは偽らざる感情であったと思われる。たとえ詩人が後日ケンブリッジでの学生生活に失意の念を抱くことになったとしても。その失意はこの時点とは切り離されている。

II

ワーズワスがキングズのチャペルに動物の姿を認めその長い背筋‘back’を連想した時、彼は湖水地方の山並みの尾根(ridge)をも連想しはしなかったであろうか。というのも尾根は元々動物の背骨に喩えられるからであり、spine=back=ridgeであるからである。更に加えてroof=ridgeという意味もあることを重ね合せて考えるならば、1850年版の‘roof’は明らかに「屋根」であると同時に、こうした‘back’に含蓄されている意味もそこに届めおくことが出来たと推察される。

第4巻はケンブリッジの夏期休暇を迎えた詩人がHawks-headに戻り、そこに1788年の一夏を過ごしたことについてのものである。この巻冒頭はWestmorlandのKendalからWindermereの丘陵地を徒歩で渡った記述であるが、1850年版に書き改められた際にはridgeという語が用いられている。

Bright was the summer's noon when quickening steps/Followed each

(4) *ibid.*, Book VIII, ll. 704–5.

other fill a dreary moor/Was crossed, a bare ridge clomb, upon whose
top/Standing alone, as From a rampart's edge,/I overlooked the bed of
Windermere,/Like a vast river, stretching in the sun.

(Book IV, ll. 1 – 6)

明るい夏の正午、もの寂しい荒野を横切る足を一步一步早めながら進んで
行き、むき出しの尾根を登り、その頂きに一人佇んでまるで壘壁の端から
のぞき見るように、私は広大な川のように太陽に向かって延びているウィン
ダムミア湖の湖床を見下した。

筆者が湖水地方からケンブリッジへの行程を実地に三度辿った経験によつて確認する限り、ヨークシャーの荒野の丘陵地帯を抜ければ、ケンブリッジに至る数十マイルの間に、なだらかな丘はとも角として、尾根という尾根のない平坦な荒野を辿ることになる。強いて意図的にウェールズに迂回して南下するといったことでもしない限り。しかしケンブリッジを目指すのにわざわざこうしたルートを通るといったことをするとは考えられない。後年ワーズワスは名詩「ワイ河再訪に際し、ティンターン寺院の数マイル上流で書いた詩章」をウェールズの山間の溪流ワイ河沿いにひっそりと建つ中世の僧院ティンターン寺院を訪れて書いてはいるものの、その最初は彼が23歳であった1793年のことであった。更に言及するまでもなく上記詩章はその5年後1793年夏にこの地を再訪して成ったものである。こうしたことを考慮すれば17歳の詩人が聳え立つ King's College Chapel を目にした時、後にして来た故郷の湖水地方の山並みとその尾根をそこに重ね見たとしても、この想像力豊かな詩人にとっては何の不思議もなかったのではないだろうか。因に Ullswater 湖の北西 Keswick の北には Saddleback という標高2847フィートの山がある。くら型の山の背、尾根を持つ山であろうか。

こうしてワーズワスが King's College Chapel を目の当りにした時、その心眼に認めたものは重層的イメージではなかったかと察せられる。そこに潜められているのは紛れもなく躍動する何ものか、想像上の生命体の息づかいであり、それはボートの少年を追い立てた岩山にも見たてられるもの、またそれは尖塔という角を持つ動物、わけても薄暗い朝の小暗い森木立の上に尖塔をそびえさせている姿は、暗い森陰に潜んでその中に踏み入った者を言い

(5) *ibid.* Book VIII, l. 321.

知れぬ恐怖へと誘う牧神パンの変容とも言うべきものであったかも知れない。詩人が「Pan, the invisible God」⁽⁶⁾「見えざる神、パン神」と称したように、パン神そのものは目に見えぬものながら、その精神は恰も地霊のような魔力をもって人の心に不可思議な精神作用を及ぼすものだからである。そうした地霊的スピリットがケンブリッジの街そのものを支配していたればこそ、この街が渦巻く潮の力となって詩人を呑み込もうとしたものと思われる。

しかしこの渦潮は例えばE. A. ポーの「メエルストルムの渦」のようにその渦の底に引き込んで奈落の底の暗闇に引きずり込む、おぞましい暗黒の力ではなく、引き入れた底から再び逆回転の弾みをつけて新たな生命の浮上を可能にさせる渦であって相違ない。詩人はそれ故にこそ吸い入れられることによって精神の高揚と希望の横溢を味合い得たのである。

‘long-back’d’から‘long-roof’d’という単純に思える書き改めにこうした種々の「想像」いやむしろ「空想」をめぐる論じることが些かこじつけの論理に墮す危険性もある。しかしワーズワスにあっては、少なくともケンブリッジの学生時代にまた後のフランス革命に心酔した時期の詩人の詩精神は‘Imagination’や‘Fancy’に格別の重きを置いて、奔放な情感に悼して自由闊達な‘Wilful Fancy’「気ままな空想」⁽⁶⁾に導かれることをむしろ潔しとしたと思われる。‘Fancy’とはそもそも‘farfetched’なものであることは詩人自身も認めるところである。フランス革命への情熱に至っては「こじつけ」どころではない激情的なまで青春の自由且つ真摯な精神の発露であったにしても、それは所詮望むべくもなかった新しい国家成立への「夢想」にひたむきに耽ったものであったと解されはしないだろうか。彼の行動そのものがwilfulとは言わずともFancyの勢いに押し流されたことは確かであろう。しかもこの際のFancyは人間精神の善への絶大な信頼が音立てて崩れ去ったことによって、自らの精神のおもむく所に過酷な修正を余儀なくされてしまった。かくして詩人は少年時代からの美質を失いかねない精神の暗闇の状況に陥り、再び自然の懷に回帰することによって、自然の治癒力に癒されるという通過儀式を経る以外には、再び人間への信頼と彼らへの愛を取り戻す術を知らなかったのである。こうした詩人の精神の遍歴の軌跡が、奇しくも‘back’d’から‘roof’d’への修正の伏線として働いた可能性があり得たかも知れないことに思いを至さずにはおれない。

(6) *ibid.*, Book VIII, l. 583.

『序曲』の目指したものは詰まるところ人間の魂の成長の過程に秘められた神秘さを、自己という詩人の人生の遍歴を媒体として示すことにあったと思われるが、詩人自ら述べるように、人生の歳月が流れ去ることによってその歳月が得させもし、失わせもすることが避け難いこととしてある以上、詩人の精神の変化もまた避け難いものであっただろう。結局これは窮局に於て自然の導きによる人間に対する愛と人間性の尊厳に対する信頼に辿り着かせるものであった。そのような境地に辿り着いた時、幼い頃より詩人を育てはぐくんだ美しく雄大な自然は詩人の心をしずめ、青春の情熱によって気まぐれな空想の導くままの奔放な想像力にも抑制を与えてくれたのである。

ここに至ると、かつてケンブリッジ生活を送った頃、自然の中に潜む'Power'に憧れにも似た念を抱かせ、'imagination'と'fancy'との渾然としたものがその勢いにふさわしいものを心眼に映し出させていたものは'forms distinct to steady me'「私を落ち着かせてくれる明確な形体」⁽⁷⁾となって'a real solid world of images about me'「私の周りにある真実の確固たるイメージの世界」⁽⁸⁾を統べることになったのである。

『序曲』第8巻には詩人生来の詩的能力が目覚めた詩作の初めの頃、空想と奇想のおとずれによって自らを取り巻いていた実際の事実や事物に色々な歪曲がもたらされたことへの自戒を読み取ることが出来るのである。血気盛んな頃の詩人が当時流行していたというゴシック趣味の影響にも流されて、きまぐれな空想のおもむく所にまかせ過ぎるといった傾向が強かったことへの反省であろう。ゴシック趣味による文学は崇高と怪奇との雑然とした作風に流れ、そこに古典的統一と簡素さを欠きがちであることは周知の通りである。529行目から531行目に記される通り、当時は世の中のありふれた死や不幸な出来事も'tragic, super-tragic'「悲劇的なあまりに悲劇的な」⁽⁹⁾ものに仕立て上げられたのである。人間の内的自我の一つとしての単なる簡素で地味な想像力がある種の刺激を受けて燃え上り、人間生活の様々な事象に対して空想や奇想によって新たな意味を付与される時、詩人にとってもそれは新たな変化の時となった。

(7) *ibid.*, Book III, ll. 597-8.

(8) *ibid.*, Book III, ll. 603-4.

(9) *ibid.*, Book VIII, l. 531.

From touch of this new power/Nothing was safe : the Elder-tree that
grew/Beside the well-Known Charnel house had then/A dismal look;
the Yew-tree had its Ghost,/That took its station there for ornament :/
Then common death was none, common mishap,/But matter for this
humour everywhere,/The tragic super-tragic, else left short.

(Book VIII, ll. 524—31.)

この新たに生れた力に触れられると、何一つとしてただではおさまらなかつた。あのよく知られた納骨堂の傍に生えたにわたこの木はその頃気味の悪い木の姿となり、イチイの木には幽霊がとりついて、飾りみたいそこに居ついていた。ありふれた死も、よくある不幸も、こうした気分にかかると、ありとあらゆる所で、悲劇的な、あまりに悲劇的な材料以外の何ものでもなくなってしまうか、さもなければあっさりと放り出されてしまった。

詩人はまたこうも続けて述べる。

Then, if a Widow, staggering with the blow/Of her distress, was known
to have made her way/To the cold grave in which her Husband slept,
One night, or haply more than one, through pain/Or half-insensate
impotence of mind/The fact was caught at greedily, and there/She was
a visitant the whole year through,/Wetting the turf with never-ending
tears,/And all the storms of Heaven must beat on her.

(Book VIII, 532—40)

あの頃もしも一人の未亡人が一夜、あるいは恐らく一夜ならず、苦痛に半ば理性を失い気も抜けた有様で、夫の眠る冷たい墓へと足を運んでいたということでも耳に入れたとすれば、その事実にむさぼるように食らいついていった。するとこの婦人はまる一年というもの、しとど流すその涙で芝を濡らし、天空の嵐という嵐に打ち据えられているに違いないということになった。

このように当時の詩人は荒唐無稽に走ることも詩人として新たな変化の時であるかのように、人間生活の平凡な事象にも空想の色付けをなしていったのである。‘Through wild obliquities would I pursue/Among all objects of

(10) *ibid.*, Book VIII, ll. 541—43.

the Fields and groves/These cravings;」[突拍子もない奇抜さで私はこうした強い欲求を野や森の全ての物象の中に追い求めて行った]⁽¹⁰⁾と。

こうした点は'long-back'd'から後年'long-roof'd'へと落着かせた経緯を探る解明のヒントとなるように思われる。その後年月を経て「ティンターン寺院の詩章」の中に認められるような悟りを得て、静かな境涯に身を置いた詩人が、若く血気盛んな頃、過度なまでに空想をほしいままにして書いたこのような詩作の個所を顧みて、書き改めを迫られるようなものがあつたとしても何の不思議はないであろう。'roof'd'と改めることが散文的に墮すきらいが生じたとしても、そこには詩人の試練の時を乗り越えてたどり着いたような言わば安心立命の境地の象徴的表われを読み取ることができるのではないだろうか。